平成18年度　8020公募研究報告書抄録

研究課題：歯周病定期管理患者のおけるロ腔関連ＱＯＬの評価
研究者名：野村義明
所　　属：鶴見大学歯学部予防歯科学講座

はじめに

歯科医療は生死に直接関連することが少ない医療であるが、「食べること」やコミュニケーションとしての「会話」など日常生活に大きく関連がある臓器に対する医療である。そのため、歯科医療は生活の質を維持、向上させるための医療であるといっても過言でない。歯科医療では、様々な場合に対応して生活の質の評価を通じて口腔の状態や機能を評価してゆくことが重要であると考えられる。

本研究課題では、歯周病治療終了後の定期管理開始時の患者に対してQOLを評価した。QOL（Quality of Life：生活の質）の評価方法は包括的尺度としてShort Form 36(SF-36)、口腔関連QOLとしてOral Impacts on Daily Performance（OIDP)を使用して口腔内の状態とQOLの関連さらにQOLの尺度間の関連を検討した。

方法

静岡県浜松市雄踏町の6カ所の歯科診療所通院中の歯周病治療終了後の定期管理を開始した患者144名で定期管理開始時のデータを収集した。対象者は男性47名（32.6%)、女性97名（67.4%）で平均年齢は男性　55.21±9.08歳、女性53.80±9.63歳、全体で54.26±9.45歳であった。

口腔内診査方法

歯周ポケットは6点法により計測を行った、またポケット測定時の出血の有無を記録した。その他、現在歯数、う蝕の有無、口腔衛生の指標としてOHI-Sを記録した。

QOL評価方法

QOLの評価は歯周病治療終了後の定期管理開始の第一回目の来院時に記載してもらった。

結果と考察

現在歯数は13本から32本で26.9±3.0と比較的現在歯数の多い集団であった。OHI-Sの平均値は0.6と口腔衛生状態は良好に保たれていた。しかし、出血の部位数が、平均値で21.4カ所、その割合も13.5%であり、歯周組織に炎症が残っている。また、4mm以上のポケットが12.3カ所、その割合が8％と骨吸収の状態も決して良い状態ではない。本研究の対象者ははくまでも歯周病治療終了後の患者で定期管理開始時であり、歯周病の治療は終了したものの歯周組織は安定した状態になるのに時間がかかるため、歯周組織の炎症や歯周病の形態的な病態が残存していたものと推測される。CPIによる評価でも、3の者が68名（47.2%）,4の者が41名（28.5%）と中等度から重度に罹患状態の者が多い集団であった。

対象者のQOL評価

QOLに関する評価では、SF-36による包括的尺度による評価では、「身体機能」、「日常役割機能（身体)」、「社会生活機能」、「日常役割機能（精神)」の各項目は平均値が90以上であり、これらの項目に対しては、高いQOLが維持されている。しかし、「身体の痛み」、「全体的健康観」、「活力」，「心の健康」の各項目は一部の者でQOLが低い状態である。

口腔関連QOLによる評価では、全ての項目で平均値は１以下で高いQOLが維持されている。しかし、摂食、見た目、社交の項目で一部問題がある者がみられた。

包括的尺度によるQOL評価と口腔関連QOLの関連

OIDPによる総合的な評価は、SF-36の身体機能を除く全ての尺度と関連があり、このことから、口腔関連QOLは包括的尺度によるQOL評価（全身のQOL）の各項目と大きいな関連性があることが示唆された。また、包括的尺度による各項目、口腔関連QOLの各項目との関連でも多くの項目で統計学的に有意な関連が見られた。また、口腔関連QOLの各項目は口腔の機能を表しているものが多い。このことから、口腔関連QOLまたは口腔の機能はさまざまな全身の機能、社交などの社会参加と関連し、口腔の機能を維持することの重要性が再認識された。